うつせみ

樋口一葉

青空文庫

一

家の間数は三畳敷の玄関までを入れて五間、手狭なれども北南吹とほしの風入りよく、庭は広々として植込の木立も茂ければ、夏の住居にうってつけと見えて、場処も小石川の植物園にちかく物静なれば、少しの不便を疵にして他には申旨のなき貸家ありけり、門の柱に札をはりしより大凡三月ごしにも成けれど、いまだに住人のさだまらで、主なき門の柳のいと、空しくなびくも淋しかりき、家は何処までも奇麗にて見こみの好ければ、日のうちには二人三人の拝見をとて来るものも無きにはあらねど、敷金三月分、家賃は三十日限りの取たてにて七円五十銭といふに、それは下町の相場とて折かへして来るは無かりき、さるほどにこのほどの朝まだき四十に近かるべき年輩の男、紡績織の浴衣も少し色のさめたるを着て、至極そそくさと落つきの無きが差配のもとに来たりてこの家の見たしといふ、案内して其処此処と戸棚の数などを見せてあるくに、それ等のことは片耳にも入れで、唯四辺の静にさわやかなるを喜び、今日より直にお借り申まする、敷金は唯今置いて参りまして、引越しはこの夕暮、いかにも急速では御座りますが直様掃除にかかりたう御座りますとて、何の子細なく約束はととのひぬ、お職業はと問へば、いゑ別段これといふ物も御座りませぬとて至極曖昧の答へなり、御人数はと聞かれて、その何だか四五人の事も御座りますし、七八人にも成りますし、始終ごたごたして埒は御座りませぬといふ、妙な事のと思ひしが掃除のすみて日暮れがたに引移り来たりしは、相乗りの幌かけ車に姿をつつみて、開きたる門を真直に入りて玄関におろしければ、主は男とも女とも人には見えじと思ひしげなれど、乗りゐたるは三十ばかりの気の利きし女中風と、今一人は十八か、九には未だと思はるるやうの病美人、顔にも手足にも血の気といふもの少しもなく、透きとほるやうに蒼白きがいたましく見えて、折から世話やきに来てゐたりし、差配が心に、此人を先刻のそそくさ男が妻とも妹とも受とられぬと思ひぬ。

荷物といふは大八に唯一くるま来たりしばかり、両隣にお定めの土産は配りけれども、家の内は引越らしき騒ぎもなく至極ひつそりとせし物なり。人数はかのそそくさにこの女中と、他には御飯たきらしき肥大女および、その夜に入りてより車を飛ばせて二人ほど来たりし人あり、一人は六十に近かるべき人品よき剃髪の老人、一人は妻なるべし対するほどの年輩にてこれは実法に小さき丸髷をぞ結ひける、病みたる人は来るよりやがて奥深に床を敷かせて、括り枕に頭を落つかせけるが、夜もすがら枕近くにありて悄然とせし老人二人の面やう、何処やら寝顔に似た処のあるやうなるは、この娘のもしも父母にては無きか、かのそそくさ男を始めとして女中ども一同旦那さま御新造様と言へば、応々と返事して、男の名をば太吉太吉と呼びて使ひぬ。

あくる朝風すずしきほどに今一人車を乗りつけける人の有けり、紬の単衣に白ちりめんの帯を巻きて、鼻の下に薄ら髭のある三十位のでつぷりと太て見だてよき人、小さき紙に川村太吉と書て張りたるを読みて此処だ此処だと車よりおりける、姿を見つけて、おお番町の旦那様とお三どんが真先に襷をはづせば、そそくさは飛出していやお早いお出、よく早速おわかりに成りましたな、昨日まで大塚にお置き申したので御座りますが何分最早、その何だか頻に嫌にお

成りなされて何処へか行かう行かうと仰しやる、仕方が御座りませぬで漸とまあ此処をば見つけ出しまして御座ります、御覧下さりませ一寸こうお庭も広う御座りますし、四隣が遠うござりますので御気分の為にも良からうかと存しまする、はい昨夜はよくお眠に成ましたが今朝ほどは又少しその、一寸御様子が変つたやうで、ま、いらしつて御覧下さりませと先に立て案内をすれば、心配らしく髭をひねりて奥の座敷に通りぬ。

二

気分すぐれて良き時は三歳児のやうに父母の膝に眠るか、白紙を切つて姉様の製造に余念なく、物を問へばにこにこと打笑みて唯はいはいと意味もなき返事をする温順しさも、狂風一陣梢をうごかして来る気の立つた折には、父様も母様も兄様も誰れも後生顔を見せて下さるな、とて物陰にひそんで泣く、声は腸を絞り出すやうにて私が悪う御座りました、堪忍して堪忍してと繰返し繰返し、さながら目の前の何やらに向つて詫るやうに言ふかと思へば、今行まする、今行まする、私もお跡から参りまするとて日のうちには看護の暇をうかがひて駆け出すこと二度三度もあり、井戸には蓋を置き、きれ物とては鋏刀一挺目にかからぬやうとの心配りも、危きは病ひのさする業かも、この繊弱き娘一人とり止むる事かなはで、勢ひに乗りて駆け出す時には大の男二人がかりにてもむつかしき時の有ける。

本宅は三番町の何処やらにて表札を見ればむむあの人の家かと合点のゆくほどの身分、今さら此処には言はずもがな、名前の恥かしければ病院へ入れる事もせで、医者は心安きを招き家は僕の太吉といふが名を借りて心まかせの養生、一月と同じ処に住へば見る物残らず嫌やに成りて、次第に病ひのつのる事見る目も恐ろしきほど悽まじき事あり。

当主は養子にて此娘こそは家につきての一粒ものなれば父母が歎きおもひやるべし、病ひにふしたるは桜さく春の頃よりと聞くに、それよりの昼夜※を合する間もなき心配に疲れて、老たる人はよろよろたよたよと二人ながら力なささうの風情、娘が病ひの俄かに起りて私はもう帰りませぬとて駆け出すを見る折にも、あれあれどうかしてくれ、太吉太吉と呼立てるほかには何の能なく情なき体なり。

昨夜は夜もすがら静に眠りて、今朝は誰れより一はな懸けに目を覚し、顔を洗ひ髪を撫でつけて着物もみづから気に入りしを取出し、友仙の帯に緋ぢりめんの帯あげも人手を借ずに手ばしこく締めたる姿、不図見たる目にはこの様の病人とも思ひ寄るまじき美くしさ、両親は見返りて今更に涕ぐみぬ、附そひの女が粥の膳を持来たりて召上りますかと問へば、嫌や嫌やと頭をふりて意気地もなく母の膝へ寄そひしが、今日は私の年季が明まするか、帰る事が出来るで御座んせうかとて問ひかけるに、年季が明るといつて何処へ帰る了簡、此処はお前さんの家では無いか、このほかに行くところも無からうでは無いか、分らぬ事を言ふ物ではありませぬと叱られて、それでも母様私は何処へか行くので御座りませう、あれ彼方に迎ひの車が来てゐまする、とて指さすを見れば軒端のもちの木に大いなる蛛の巣のかかりて、朝日にかがやきて金色の光ある物なりける。

母は情なき思ひの胸に迫り来て、あれあんな事を、貴君お聞遊しましたかと良人に向ひて忌はし気にいひける、娘は俄に萎れかへりし面に生々とせし色を見せて、あのそれ一昨年のお花見の時ねと言

ひ出す、何ゑと受けて聞けば学校の庭は奇麗でしたねへとて面しろさうに笑ふ、あの時貴君が下すつた花をね、私は今も本の間へ入れてありまする、奇麗な花でしたけれどももう萎れてしまひました、貴君にはあれから以来御目にかからぬでは御座んせぬか、何故逢ひに来て下さらないの、何故帰つて来て下さらぬの、もうお目にかかる事は一生出来ぬので御座んするか、それは私が悪う御座りました、私が悪いに相違ござんせぬけれど、それは兄様が、兄が、ああ誰れにも済ませぬ、私が悪う御座りました免して免してと胸を抱いて苦しさうに身を悶ゆれば、雪子や何も余計な事を考へては成りませぬよ、それがお前の病気なのだから、学校も花もありはしない、兄様も此処にお出でなさつてはゐないのに、何か見えるやうに思ふのが病気なのだから気を落つけて旧の雪子さんに成ておくれ、よ、よ、気が付きましたかへと脊を撫でられて、母の膝の上にすすり泣きの声ひくく聞えぬ。

三

番町の旦那様お出と聞くより雪や兄様がお見舞に来て下されたと言へど、顔を横にして振向ふともせぬ無礼を、常ならば怒りもすべき事なれど、ああ、捨てて置いて下さい、気に逆らつてもならぬからとて義母が手づから与へられし皮蒲団を貰ひて、枕もとを少し遠ざかり、吹く風を背にして柱の際に黙然としてゐる父に向ひ、静に一つ二つ詞を交へぬ。

番町の旦那といふは口数少なき人と見えて、時たま思ひ出したやうにはたはたと団扇づかひするか、巻煙草の灰を払つては又火をつけて手に持てゐる位なもの、絶えず尻目に雪子の方を眺めて困つたものですなと言ふばかり、ああこんな事と知りましたら早くに方法も有つたのでせうが今に成つては駟馬も及ばずです、植村も可愛想な事でした、とて下を向いて歎息の声を洩らすに、どうも何とも、我は悉皆世上の事に疎しな、母もあの通りの何であるので、三方四方埒も無い事に成つてな、第一は此娘の気が狭いからではあるが、否植村も気が狭いからで、どうもこんな事になつてしまつたで、我等二人が実に其方に合はせる顔も無いやうな仕義でな、然し雪をも可愛想と思つて遣つてくれ、こんな身に成つても其方への義理ばかり思つて情ない事を言ひ出しをる、多少教育も授けてあるに狂気するといふは如何にも恥かしい事で、この方から行くと家の恥辱にも成る実に憎むべき奴ではあるが、情実を汲んでな、これほどまで操といふものを取止めて置いただけ憐んで遣つてくれ、愚鈍ではあるが子供の時からこれといふ不出来しも無かつたを思ふと何か残念の様にもあつて、誠の親馬鹿といふので有らうが平癒ぬほどならば死ねとまでも諦がつきかねる物で、余り昨今忌はしい事を言はれると死期が近よつたかと取越し苦労をやつてな、大塚の家には何か迎ひに来る物が有るなどと騒ぎをやるにつけて母がつまらぬ易者などにでも見て貰つたか、愚な話しではあるが一月のうちに生命が危ういとか言つたさうな、聞いて見ると余り心よくも無いに当人も頻と嫌がる様子なり、ま、引移りをするが宜からうとて此処を探させては来たが、いやどうも永持はあるまいと思はれる、殆毎日死ぬ死ぬと言て見る通り人間らしい色艶もなし、食事も丁度一週間ばかり一粒も口へ入れる事が無いに、そればかりでも身体の疲労が甚しからうと思はれるので種々に異見も言ふが、どうも病ひの故であらうか

とかくに誰れの言ふ事も用ひぬには困りはてる、医者は例の安田が来るのでかう素人まかせでは我ままばかりつのつて宜く有るまいと思はれる、我の病院へ入れる事は不承知かと毎々聞かれるのであるが、それもどう有らうかと母などは頻にいやがるので我も二の足を踏んでゐる、無論病院へ行けば自宅と違つて窮屈ではあらうが、何分この頃飛出しが始まつて、我などは勿論太吉と倉と二人ぐらゐの力では到底引とめられぬ働きをやるからの、万一井戸へでも懸られてはと思つて、無論蓋はして有るが徃来へ飛出されても難義至極なり、それ等を思ふと入院させやうとも思ふが何か不憫らしくて心一つには定めかねるて、其方に思ひ寄も有あらば言つて見てくれとてくるくると剃たる頭を撫でて思案に能はぬ風情、はあはあと聞ゐる人も詞は無くて諸共に溜息なり。

娘は先刻の涙に身を揉みしかば、さらでもの疲れ甚しく、なよなよと母の膝へ寄添ひしまま眠れば、お倉お倉と呼んで附添ひの女子と共に郡内の蒲団の上へ抱き上げて臥さするにはや正体も無く夢に入るやうなり、兄といへるは静に膝行寄りてさしのぞくに、黒く多き髪の毛を最惜しげもなく引つめて、銀杏返しのこはれたるやうに折返し折返し髷形に畳みこみたるが、大方横に成りて狼藉の姿なれども、幽霊のやうに細く白き手を二つ重ねて枕のもとに投出し、浴衣の胸少しあらはに成りて締めたる緋ぢりめんの帯あげの解けて帯より落かかるも婀かしからで惨ましのさまなり。

枕に近く一脚の机を据ゑたるは、折ふし硯々と呼び、書物よむとて有し学校のまねびをなせば、心にまかせて紙いたづらせよとなり、兄といへるは何心なく積重ねたる反古紙を手に取りて見れば、怪しき書風に正体得しれぬ文字を書ちらして、これが雪子の手跡かと情なきやうなる中に、鮮かに読まれたるは村といふ字、郎といふ字、ああ植村録郎、植村録郎、よむに得堪へずして無言にさし置きぬ。

四

今日は用なしの身なればとて兄は終日此処にありけり、氷を取寄せて雪子の頭を冷す看護の女子に替りて、どれ少し我がやつて見やうと無骨らしく手を出すに、恐れ入ます、お召物が濡れますと言ふを、いいさ先させて見てくれろとて氷袋の口を開いて水を搾り出す手振りの無器用さ、雪や少しはお解りか、兄様が頭を冷して下さるのですよとて、母の親心付れども何の事とも聞分ぬと覚しく、目は見開きながら空を眺めて、あれ奇麗な蝶が蝶がと言ひかけしが、殺してはいけませんよ、兄様兄様と声を限りに呼べば、こらどうした、蝶も何も居ない、兄は此処だから、殺しはせぬから安心して、な、宜いか、見えるか、ゑ、見えるか、兄だよ、正雄だよ、気を取直して正気になつて、お父さんやお母さんを安心させてくれ、こら少し聞分てくれ、よ、お前がこの様な病気になつてから、お父様もお母様も一晩もゆるりとお眠に成つた事はない、お疲れなされてお痩せなされて介抱してゐて下さるのを孝行のお前に何故わからない、平常は道理がよく了解る人では無いか、気を静めて考へ直してくれ、植村の事は今更取かへされぬ事であるから、跡でも懇に吊つて遣れば、お前が手づから香花でも手向れば、あれは快よく瞑する事が出来ると遺書にも有つたと言ふでは無いか、あれは潔よくこの世を思ひ切つたので、お前の事も合せて思ひ切つたので決して未練は残し

てゐなかつたに、お前がこの様に本心を取乱して御両親に歎をかけると言ふは解らぬでは無いか、あれに対してお前の処置の無情であつたもあれは決して恨んではゐなかつた、あれは道理を知つてゐる男であらう、な、さうであらう、校内一流の人だとお前も常に褒めたではないか、その人であるから決してお前を恨んで死ぬ、そんな事はある筈がない、憤りは世間に対してなので、既に其事は人も知つてゐる事なり遺書によつて明かでは無いか、考へ直して正気に成つて、その後の事はお前の心に任せるから思ふままの世を経るが宜い、御両親のある事を忘れないで、御両親がどれほどお歎きなさるかを考へて、気を取直してくれ、ゑゝ宜いか、お前が心で直さうと思へば今日の今も直れるでは無いか、医者にも及ばぬ、薬にも及ばぬ、心一つ居処をたしかにしてな、直つてくれ、よ、よ、こら雪、宜いか、解つたかと言へば、唯うなづいて、はいはいと言ふ。

女子どもは何時しか枕もとを遠慮して四辺には父と母と正雄のあるばかり、今いふ事は解るとも解らぬとも覚えねども兄様兄様と小さき声に呼べば、何か用かと氷袋を片寄せて傍近く寄るに、私を起して下され、何故か身体が痛くてと言ふ、それは何時も気の立つままに駆け出して大の男に捉へられるを、振はなすとて恐ろしい力を出せば定めし身も痛からう生疵も処々に有るを、それでも身体の痛いが知れるほどならばとはかなき事をも両親は頼もしがりぬ。

お前の抱かれてゐるは誰君、知れるかへと母親の問へば、言下に兄様で御座りませうと言ふ、さうわかればもう子細はなし、今話して下された事覚えてかと言へば、知つてゐまする、花は盛りにと又あらぬ事を言ひ出せば、一同かほを見合せて情なき思ひなり。

良しばしありて雪子は息の下に極めて恥かしげの低き声して、もう後生お願ひで御座りまする、その事は言ふて下さりますな、そのやうに仰せ下さりましても私にはお返事の致しやうが御座りませぬと言ひ出るに、何をと母が顔を出せば、あ、植村さん、植村さん、何処へお出遊ばすのと岸破と起きて、不意に驚く正雄の膝を突のけつつ椽の方へと駆け出すに、それとて一同ばらばらと勝手より太吉おくらなど飛来るほどにさのみも行かず椽先の柱のもとにぴたりと坐して、堪忍して下され、私が悪う御座りました、始めから私が悪う御座りました、貴君に悪い事は無い、私が、私が、申さないが悪う御座りました、兄と言ふてはをりまするけれど。むせび泣きの声聞え初めて断続の言葉その事とも聞わき難く、半かかげし軒ばの簾、風に音する夕ぐれ淋し。

五

雪子が繰かへす言の葉は昨日も今日も一昨日も、三月の以前もその前も、更に異なる事をば言はざりき、唇に絶えぬは植村といふ名、ゆるし給へと言ふ言葉、学校といひ、手紙といひ、我罪、おあとから行まする、恋しき君、さる詞をば次第なく並べて、身は此処に心はもぬけの※に成りたれば、人の言へるは聞分るよしも無く、楽しげに笑ふは無心の昔しを夢みてなるべく、胸を抱きて苦悶するは遣るかた無かりし当時のさまの再び現にあらはるるなるべし。

おいたはしき事とは太吉も言ひぬ、お倉も言へり、心なきお三どんの末まで嬢さまに罪ありとはいささかも言はざりき、黄八丈の袖の長き書生羽織めして、品のよき高髷にお根がけは桜色を重ねたる白の丈長、平打の銀簪一つ淡泊と遊して学校がよひのお姿今も目に

残りて、何時旧のやうに御平癒あそばすやらと心細し、植村さまも好いお方であつたものをとお倉の言へば、何があの色の黒い無骨らしきお方、学問はゑらからうともどうで此方のお嬢さまが対にはならぬ、根つから私は褒めませぬとお三の方めば、それはお前が知らぬからそんな憎くていな事も言へるものの、三日交際をしたら植村様のあと追ふて三途の川まで行きたくならう、番町の若旦那を悪いと言ふではなけれど、彼方とは質が違ふて言ふに言はれぬ好い方であつた、私でさへ植村様が何だと聞いた時にはお可愛想な事をと涙がこぼれたもの、お嬢さまの身に成つては愁らからうでは無いか、私やお前のやうなおつと来いならば事は無いけれど、不断つつしんでお出遊ばすだけ身にしみる事も深からう、あの親切な優しい方をかう言ふては悪いけれど若旦那さへ無かつたらお嬢さまも御病気になるほどの心配は遊ばすまいに、さういへば植村様が無かつたら天下泰平に納まつたものを、ああ浮世は愁らいものだね、何事も明すけに言ふて除ける事が出来ぬからとて、お倉はつくづく儘ならぬを傷みぬ。

つとめある身なれば正雄は日毎に訪ふ事もならで、三日おき、二日おきの夜な夜な車を柳のもとに乗りすてぬ、雪子は喜んで迎へる時あり、泣いて辞す時あり、稚子のやうに成りて正雄の膝を枕にして寝る時あり、誰が給仕にても箸をば取らずと我儘をいへれど、正雄に叱られて同じ膳の上に粥の湯をする事もあり、癒ってくれるか。癒りまする。今日癒ってくれ。今日癒りまする、癒って兄様のお袴を仕立て上げまする、お召も縫ふて上げまする。それは辱し早く癒つて縫ふてくれと言へば、さうしましたらば植村様を呼んで下さるか、植村様に逢はして下さるか、むむ逢はして遣る、呼んでも来る、はやく癒つて御両親に安心させてくれ、宜いかと言へば、あ明日は癒りまするとも憚りもなく言ひけり。

正しく言ひしを心頼みに有るまじき事とは思へども明日は日暮も待たず車を飛ばせ来るに、容体ことごとく変りて何を言へども嫌々とて人の顔をば見るを厭ひ、父母をも兄をも女子どもをも寄せつけず、知りませぬ、知りませぬ、私は何も知りませぬとて打泣くばかり、家の中をば広き野原と見て行く方なき歎きに人の袖をもしぼらせぬ。

俄かに暑気つよく成し八月の中旬より狂乱いたく募りて人をも物をも見分ちがたく、泣く声は昼夜に絶えず、眠るといふ事ふつに無ければ落入たる眼に形相すさまじくこの世の人とも覚えず成ぬ、看護の人も疲れぬ、雪子の身も弱りぬ、きのふも植村に逢ひしと言ひ、今日も植村に逢ひたりと言ふ、川一つ隔てて姿を見るばかり、霧の立おほふて朧気なれども明日は明日はと言ひて又そのほかに物いはず。

いつぞは正気に復りて夢のさめたる如く、父様母様といふ折の有りもやすと覚束なくも一日二日と待たれぬ、空蝉はからを見つつもなぐさめつ、あはれ門なる柳に秋風のおと聞えずもがな。

青空文庫情報

底本：「にごりえ・たけくらべ」新潮文庫、新潮社
1949（昭和24）年6月30日発行
2003（平成15）年1月10日116刷改版
2005（平成17）年5月20日126刷
初出：「讀賣新聞」
1895（明治28）年8月27日号～31日号
※底本巻末の編者による語注は省略しました。
※送りがな、振りがな、漢字の使い方の不統一は、底本通りです。
入力：岡村和彦
校正：青米
2016年9月9日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

うつせみ

樋口一葉

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/